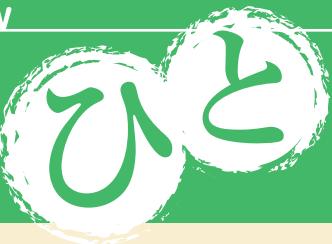


今回のひと



聖マリア病院

小児総合研究センター・レット症候群研究センター長

まつ いし とよ じ ろう

松石 豊次郎

1975年久留米大学医学部卒業。同年久留米大学助手、78~79年鳥取大学脳神経小児科留学、87~89年米国ノースウェスタン大学小児記念病院神経科留学、87年久留米大学講師、90年旧国際協力事業団(JICA)によるパキスタン・イスラマバード小児病院出張、93年久留米大学助教授、2001年久留米大学小児科主任教授を経て、15年4月より現職。「こどもの日」が制定された1949年5月5日生まれの67歳。

小児科医のノウハウ伝授 難病克服へ治療法の確立めざす

——脳波判読セミナーを院内で開催されましたね。

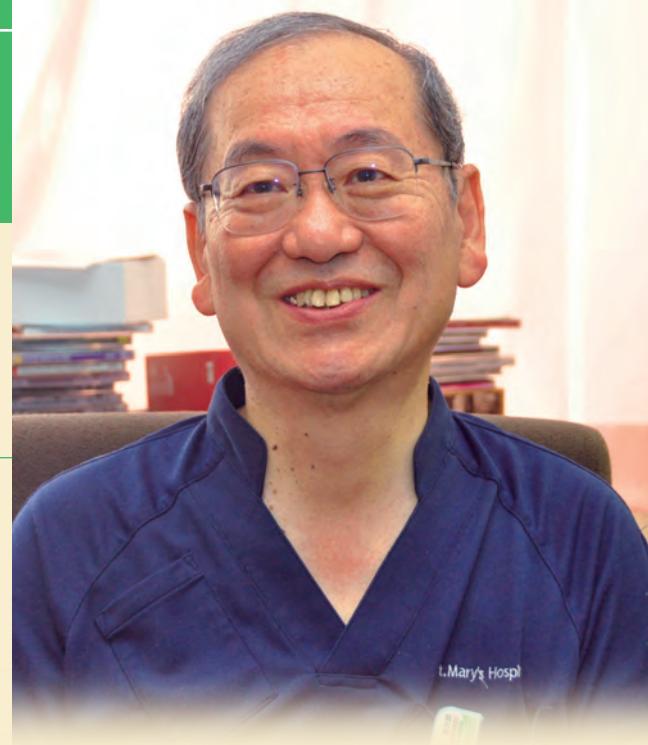
てんかんや熱けいれんを診断する場合、脳波が重要な手がかりになります。小児の正常脳波は12歳くらいまで変化し続け、異常脳波でも良性のケースや発作が止まりにくいケース、脳外科治療を行うべきケースなど、さまざまです。

若い医師向けのトレーニング・セミナーは、こうした小児脳波の特徴を理解し、判読するノウハウを身につけてもらうため、約1年かけ5回に分けて開催しました。当院の小児科医は、週に5件から10件ほどの脳波検査をオーダーします。これまでには久留米大学に判読を依頼していましたが、今では自分たちで読み解き、診療録に所見を書き込むようになりました。日々成長する若い医師といっしょに診療の現場に立つことができ、大いにやりがいを感じています。

患者さんの診察には十分な時間をかけ、家族の話もていねいに聞くよう指導しています。けいれん発作では、いつ、どれくらいの時間、どのような状態だったのか、具体的に聞き取り、病歴として記録することが大切です。

——新しい時代の小児科医には、何が求められているのでしょうか。

1977年から翌年にかけて、聖マリア病院で「修行」しました。当時はまだ医師が少なく、先輩医師の背中を見ながら、知識やノウハウを懸命に身につけようとしたものです。先人の「秘伝」はとても有益ですが、今は診療科や医師が大幅に増え、体系的に教え学ぶ教育システムが整っています。当院は、国公立病院と並ぶ規模を誇る一方で、医師や看護師、その他のメディカルスタッフを含む全員のコミュニケーションがスムーズで、仕事がやりやすいですね。より高水準の医療が求められる中、当院



が久留米・筑後地区という地域に根ざした医療を行うのは当然です。その上で、小児科医は個々の得意分野を軸足にした「総合医」を目指すべきではないでしょうか。

——女児の難病、レット症候群に取り組んで来られました。新たな治療への展望は見えてきましたか。

レット症候群という神経系の発達障害に出会って30年が過ぎました。1歳前後から3歳までに、手足をうまく動かすことができなくなり、常同運動と言われる、手もみ、手絞り様の特有な運動が出て、それまで出ていた言葉が出なくなります。てんかんや自閉症状も現れます。国内には20歳までの患者さんが約1100人います。久留米大学と聖マリア病院は「親の会」の協力を得て、このうち約80人をフォローし、国の研究班をリードしてきました。

MECP2という遺伝子の変異がおもな原因だということは判明していますが、詳細な発病メカニズムは不明で効果的な治療方法も分かっていませんでした。そんな中、研究班は画期的な治療法を開発し、特許出願も無事終わりました。医薬品などを開発段階から審査・指導するPMDA(独立行政法人 医薬品医療機器総合機構)でプレゼンテーションをすでに終え、確かな感触を得ています。基礎研究も行い、海外の医学専門誌にも研究概要が掲載され、今後の治療研究に光が見えてきました。

——スポーツジムで音楽鑑賞だとか。

認知症予防にモーツアルトの音楽が効果的だと聞き、ヘッドフォン姿で週2回、3時間ほど汗を流します。ところが、しばらく前にウォーカーマンが行方不明になり、今はもっぱら研究室のミニコンポで聴いています。けさの選曲はベルリオーズの「幻想交響曲」。体調万全ではない小澤征爾さんが指揮する姿と息づかいを想像すると、研究への気力が静かにみなぎってきます。